

# 絵画修復家のアトリエから

加賀優記子……絵画修復家

肌寒い気候の続いた6月号で、次はきつとさわやかな気候になっていく事でしょうと書いたのですが、まさかこんな事になろうとは思っていませんでした。……暑い！

は、「水彩画家のプロとしての技巧」に関して、あんまり自信がありません。だから、普段生徒さん達にはデッサンや油彩画を教えるのですが、まあ、私のモットーとして、「やりたい事をやっていただく」という方針なので、この方の場合も是非そうして欲しいと、とりあえず教える側の私も一緒に勉強するような感じで水彩に取り組んでいるところなのです。

こうして、水彩を教える時に、ひとつ思い出す事があります。ずっと自分の興味を油彩画に置いてきた私が、ある日、フランス学士院に近いセーヌ河岸のギャラリーの前を通りすがった時、窓際から見えた作品が水彩で、しかしその深いマチエールのすごさにびっくりして画廊にオープニングセレモニーの真つ最中だったにもかかわらず、思わず飛び込んで入ってしまった。お客様はなんだか政府関係筋みたいな偉そうなおじさんが多くつて、見れば画家も髭ぼうぼうの迫力のある人で、(皆アラブ系の人たちだった)とにかく普通ならひるんでしまうところだけれど……そんな事はどうでもいい程、作品がすごい。

それはアルシュの厚手の紙に白いレースの模様や窓の内側の室内を描いてあるだけのものだった。でも、そのレースの透かし模様を絶妙な技巧で抜いてあって、それが室内の色彩と共にアルシュのゴボゴボとした質感と絡んで断然油絵のマチエールなんかよりもさわやかで、且つ重厚。残念ながら作者の名前はもう覚えていません。でも、その作品を見てから私の水彩の捉え方は変わった。《油より、いいじゃん!》

とにか、いまでも、後にも先にも、あの作品を超える物はまだ見た事が無い。もし水彩を描くとしたら、よくある美大入試に描くようなあんな味気ない水彩ではなくって、あの作品を超えるようなものでないかと、ついそう思ってしまうものだから、いつだって水彩は私のコンプレックスになってしまっています。

だから、このやる気満々の年配の生徒さんには始めから高価だけれどアルシュの薄手、厚手、ワットマンとかファブリアーノ、さまざまな紙を使って試してもらっています。

自分の肌合った紙を探す事、紙を大事にする事は、描く事を大事にする事。

下手な人でも、いい紙なら失敗したって何度でも海綿で洗える。むしろ描きいいのです。

以前、ドイツに滞在していた頃、私のことを聞きつけたとある大きな製紙会社の社長さんに、会社の応接室に呼び出されました。その古くからある南ドイツの製紙工場は、販路拡大のために日本に進出したいとのこと。沢山の種類の紙のサンプルを手渡され、是非日本であたりをつけてください、と頼まれて眺めて見ると、その紙のサンプル

私のアトリエでは、週一回だけ絵画教室を開いています。そしてここ数ヶ月、「水彩だけやりたい」といつてこられた年配の方を一人教えることになりました。正直言って私は基本的にテンペラや油彩画を主に勉強してきたので、水彩について

はとても素晴らしいものばかりでした。しかし咄嗟に私は画材店にあるスケッチブックの事を思い出しました。そう言えば、あれつてずいぶんいろいろな種類が出てたなあ、それに、マルマンとかミューズつて書いたのが多かった気がする。と、すると画材店では販路が無いから……。では、他の可能性としても日本には王子製紙とか日本製紙とか大きい製紙会社が一杯あるもんね……。

なんかつと無理な気がするなあ、とやんわりその場で断つた、そんな事があつたのです。その日はそれで工場の中を見学させてくれて、紙に混ぜる糊料、顔料、コーティングなど、知らなかつた洋紙製造の色々な知識を得る事が出来ました。それは昔フランスの田舎をバカンス中に、小さなお城の倉を見学したところ、郷土物産コーナーで中世の時代の紙造りを係のお姉さんに無理やり体験させられた(まるでダルタニアンが着るようなアンティークの綿のブラウスを繊維に粉碎して和紙を漉くように……というよりぎゅつと圧縮してガビンガビンの紙を作る。これはアルシュの原型?)その当時のよりもなんと発達した紙の技術でしよう!

で、この間、懇談会の会場でたまたまミューズの社長さんとお話する機会を得たので、私つたら一生懸命に、「有名な紙」を数種混ぜて綴じこんだスケッチブックを作つて下さいよお!つて(大きい紙を生徒さんのためにいつも裁断するのが面倒臭いので)お願いしてました。その時、何故かその事には触れないで社長さんは「ホノルムラソンに出る」お話をにこにこしてらつしやいました。後でカタログを見たらなあんだ、ちゃんともあるんじゃない、そういうの。知らなかつたなあ。それと、最近ちよつと王子製紙に何う用があつて、そこにもドーンと「海外輸入業務室」なんていうのがあつた。やつぱりドイツであんなこと引き受けなくつて良かったな、つてつくづく思いました。そういうことで、餅屋は餅屋、私もおとなしく修復と、あと苦手な水彩画のハイ・テクニック習得に、頑張つてまいります……。なにしろ、その私の生徒さんも75歳になるおばあちゃんなのにガゼン頑張りやなの。

えーと、ミューズの社長さんもお年は存じませんが、私よりはとてご年配なのは確か。なのに私ときたらジョギングはおろか家から2分のスーパーに走つていっただけで息が切れる。やばいよねえ……。

まつたくいまどきの若いもんはつて言われそう……え?あんなはもう若いもんじゃないつて?……こりや失礼しました!

かがゆきこ●絵画修復家。大学卒業後、絵画の古典技法を学ぶためにパリに留学。ルーブル美術館の絵画修復員を経て、現在は講習で修復工房を主宰。